

## トマス・アキナス『神学綱要』の概要

Compendium *Compendii Theologiae* Thomae Aquinatis

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

## 要 約

トマスの著作の中でもあまり研究されてこなかったと言われる著作『神学綱要』についてその全体をさらに要約し、紹介する。特に第1部の第1篇にあたる「信仰について」を、純粹現実態および現実態という概念を中心に体系をたどりながら要約する。神の一なる神性については純粹現実態という概念が鍵となるが、三位のペルソナについての議論ではそれほど現実態という概念は現れてこない。創造に関しては純粹現実態である神を頂点とし、現実態の多寡による存在者の序列があることが語られるが、その後の議論では、人間が、その知性が神を認識するという現実態において完成するという文脈が優勢になっていくことを示す。

**Key Words** (8語以内): *Compendium Theologiae*, 『神学綱要』, 純粹現実態, 神の一なる本質, 人間の現実態における完成, 純粹現実態を頂点とする世界秩序

## 1. はじめに

## 1.1 執筆時期

『神学綱要』は、これまであまり研究されてこなかったとも言われている<sup>(1)</sup>著作である。その執筆時期を定めることは困難で、1259年から1273年までの幅があるが、現在では、死直前の時期1272-73年という説と、1265-67年、『対異教徒大全』の執筆後で*De potentia*の執筆と同時期とする説とがあるようである<sup>(2)</sup>。

この著書がトマスの晩年のものであるとする説の根拠の一つは、これが未完に終わっていることであろう。一方、1265-67年を主張する場合、内容に関していくつかの章が『対異教徒大全』と似ていること、文体が『対異教徒大全』と似ていることが根拠として挙げられているようである<sup>(3)</sup>。また、完成している第1部と完成せず第10章の途中で終わっている第2部の執筆の時期を分ける主張もあるという。すなわち第1部は1265-67年の執筆、第2部は1272-73年の執筆と考えるものである。

## 1.2 執筆意図と全体の構成

トマスは、本書の第1章で次のように述べている。

「永遠の父の御言葉はその測り難さを以ってすべてを包み、人間がその罪のために小さくなっているのを神の栄光の高貴さに呼び戻そうとしておられ、〔その道が〕短くなるように望まれた

ので、我々の短さを受け入れられ、御自分の大いさを取っておかれなかった。

そして固く掴むべき天の言葉の教えから誰も締め出されることがないように、熱心な者たちに対し、聖なる書の様々な教えを通して、多岐にわたりかつ明晰に伝えてきたことを、それを業とする者向けには短い集成でもって人間の救いについての教えを締めくくった。

なぜなら、人間の救いは真理を知ることにより、様々な誤りのために人間の知性が暗くなってはならないからである。(また人間の救いは) 然るべき目的を目指すことにあり、誤った目的に向かって真の幸せを失ってはならないからである。〔また人間の救いは〕正義の遵守にあり、様々な悪徳で汚れてはならないからである。そして〔御言葉は〕人間の救いに必要である真理認識を、短くコンパクトな信仰箇条にまとめられた。だからこそ使徒〔パウロ〕は、「ローマの信徒への手紙」第9章(第28節)でこう言っているのだ。「地上では神は御言葉を短くされるだろう」。そして「これこそ信仰の言葉であり、我々はそれを述べ伝えよう」。〔また御言葉は〕人間の意図を短い祈りで正しくされ、それ〔短い祈り〕によって我々に祈ることを教えられる時、我々の意図と希望が何に向かうべきかを示された。〔また御言葉は〕法の遵守という形で現れる人間の正義を一つの掟に集約された。「なぜなら法を満たすのは愛だからである」<sup>(4)</sup>。

すなわち、キリストは、信仰についての教えを信仰箇条というかたちで要約され、希望についての教えを主の祈りというかたちで要約され、愛によって満たされるべき法の遵守という形で現れる人間の正義を一つの掟に集約した。これらはキリストが有限である人間のために、ご自身の無限さにこだわらず、人間が理解できるところまで降りてきて人間に与えられた、教えの要約であり、キリストの謙遜の顕れであるということまで示唆した<sup>(7)</sup>上で、トマスは本書の執筆意図を次のように明確にする。

「そこで使徒〔パウロ〕は「コリントの信徒への手紙一」第13章(第13節)で、信仰と希望と愛は、言わば我々の救いが要約されている主要なこととして現世の生の完成はすべてこれらのうちで成ると教える時、こう言ったのだ。「今は信仰、希望、愛が続く」と。それゆえこの三つは、聖アウグスティヌスが言うように、それらでもって神が崇められているのである。

以上のような理由で、最も高貴なる兄弟ベルナルドゥス、あなたにキリスト教の教えを要約して、常に目の前に置いていられるように、あなたに送ろうと思うが、それは、この〔信仰、希望、愛〕3つに関わることに、目の前の作品で我々〔つまり私とあなた〕の関心全体が向かっているからである。我々は最初に信仰を、次いで希望を、3番目に愛を扱うことにしよう。この順序で使徒〔パウロ〕も語っていたからであり、正しく考えればこう〔この順序に〕ならざるを得ないからである。すなわち、正しい愛が可能であるには、希望の然るべき目的が希望によって立てられなければならない、さらにこれ〔希望の然るべき目的が立てられること〕は、真理を知ることなしには可能でない。だから最初に必要なのは信仰である。それによってあなたが真理を知れるように。次いで必要なのは希望である。それによってあなたが然るべき目的に関心を置けるように。3番目に必要なのは愛である。あなたの情がすべてそれ〔愛〕の秩序の下にあるように」<sup>(5)</sup>。

つまり、トマスは、信仰、希望、愛のうちに救いの完成はあり、この3つがそのまま我々の救

いの要約であるから、この著書で、信仰、希望、愛について語ることが執筆意図であると述べているのである。そして、そのそれぞれに対しては、キリストが、短くまとまった形で示して下さった信仰箇条、祈り、掟がある。そして、第1部「信仰について」において、トマスは、自分の議論している内容が信仰箇条に含まれているということを、適宜、章を割いて主張し、また途中で途絶している第2部「希望について」においても、祈りが我々に希望すべき事柄を教えてくれると述べられ、「神の名が聖とされるように」すなわち我々が神の名が聖であることを完全に認識できるように、「神の国が我々のもとに来るように」すなわち我々が神の栄光に与かれるようにと、主の祈りの順序に従い、主の祈りに言及しながら議論が始まっている。

したがって、トマス自身の執筆意図は、神による人間の救い全体を、短くまとめて論じることにあつたと言える。

## 2. 内容

### 2.1 第1部「信仰について」で取り上げる主題

トマスは『神学綱要』第1部「信仰について」の最初の章において次のように述べる。

「さて信仰は、将来我々を至福にするあの認識を、ある意味前もって味わうことである。だから使徒〔パウロ〕はこれを、「希望すべき事柄のより先にあるもの」だと言う。そのころは、我々のうちに希望すべきことを、すなわち将来の至福を、ある意味始まりの形で留まらせるものだという事である。そして至福にする認識は2つのことに関して成立すると主は教えられた。すなわち神の三位一体とキリストの人性に関して。そこで〔ヨハネは〕御父に語ってこう言うのだ。「これこそ永遠の命、彼らはあなたが真の神であることを知るだろう、そしてあなたが遣わされたイエス・キリストを」。

それゆえ信仰による認識はすべて、この2つ、すなわち神の三位一体とキリストの人性を巡るものである。これは驚くに当たらない。キリストの人性はそれを通して神性に至らしめられる道だからである。したがって道中であつては、目的地に至ることができるよう、道を知っておかなければならない。天国にて神の諸々の恵みの業が満ちるには、〔人々が〕それを通して救われる道の認識を有していなければならない。だからこそ主は弟子たちにこう言われたのだ。「この私がどこに行くのかもあなたたちは知っており、道をもあなたたちは知っている」。

神性を巡っては3つのことが知られねばならない。最初に本質の一性に関する事が、次いでペルソナの三性に関する事が、3番目に神性による業に関する事が<sup>6)</sup>。

ここでトマスが述べていることは、第1部の構成と一致する。トマスはこの第1部で、まず神の三位一体について論じ、次いでキリストの人性について論じている。そして、神の神性すなわち三位一体についての論考の中でトマスは、神の本質の一性、ペルソナの三性、そして神性による業という3つの主題について、この順序で論じている。

## 2.2 神の本質の一性

トマスは神の本質の一性については、第3章から第34章まで以上の議論を展開している。その議論の論拠の流れをまとめると以下のようになる。

まず、神は何であるかについて、神は第一の動かすもの、第1原因であると述べられる<sup>(7)</sup>。そして、神は上位の原因を持たないので不変であり、不変であるので永遠であり、神自身のゆえに必然的に存在し、常にあり、そのうちには連続がない<sup>(8)</sup>。

また不変であるがゆえに、単一である<sup>(9)</sup>。

単一であるがゆえに、神は本質そのものであり、神の存在そのものが神の本質である<sup>(10)</sup>。

神が不変であることには純粹現実態であることが伴い、ゆえに、類と種差の複合がなく、したがって何らかのもの一種ではない<sup>(11)</sup>。

また、神は存在そのものがその本質であるがゆえに、神は類ではあり得ず、種でもあり得ない<sup>(12)</sup>。

神は類でも、種でもなく、またその存在がその本質であるので、神は唯一である<sup>(13)</sup>。

神は単一であるがゆえに、また不変であるがゆえに、複合体であり変化を被り得る物体ではあり得ない。また不変であるがゆえに、物体の形相でなく、また第1の動かすもの、第1原因であるがゆえに物体の力でもない<sup>(14)</sup>。

神は物体を超えており、かつ純粹現実態であるから、神は本質において無限である<sup>(15)</sup>。

神は本質において無限であるので、力においても無限である<sup>(16)</sup>。

神における無限は、本質におけるものであり、物体の量におけるものではないので、不完全さではない<sup>(17)</sup>。

力において無限であるから、神のうちにはすべてのものの完全性がより卓越した仕方で見出される<sup>(18)</sup>。

神のうちにはすべてのものの完全性がより卓越した仕方で見出されることと、神が単一であることとのゆえに、もろもろの完全性は神のうちで一つであり、それゆえに神のうちに偶有はない<sup>(19)</sup>。

人間はその不完全さゆえに、神を多くの名で呼ぶが、そのことは神の単一性と対立するものではないこと、神について人間が用いる表現は同義語でなく、名の定義によって神について何らかのことを定義することはできないこと、そして、神については同名同義的に語られるのでもなく、同名異義的に語られるのでもなく、アナログ的に語られるということ述べる。すなわち、不完全なものから、完全性の起源である神へ昇っていくという仕方語られる<sup>(20)</sup>。

そして、神は、完全性の起源であるがゆえに、純粹現実態であるがゆえに、最初の動かすものであるがゆえに、神は知性認識するもの、すなわち知性である。そして、純粹現実態であるがゆえに、神は現実態における知性であり、形象に媒介されずにその本質によって知性認識するものであり、知性認識するはたらきそのものである<sup>(21)</sup>。

また、その本質によって知性認識するものであるがゆえに、神は本来的に自分自身を知性認識するものであるが、それゆえに、神は完全な善である自分自身を認識し、そしてその知性認識された善を意志する<sup>(22)</sup>。

神は純粹現実態であるがゆえに、神においては現実態と可能態は同一であり、それゆえに意志の対象と意志は同一であり、神が知性であるということは神の本質が神の知性であるということにほかならず、そしてここでの神の意志の対象は完全なる善、すなわち神、すなわち神の本質である、あるいは神がそれによってすべてを認識する神の本質そのものであるので、神の本質そのものと神の意志は同一であり、したがって、神の知性と神の意志は同一である<sup>(23)</sup>。

神においては意志されるものと意志するものが同一であるがゆえに、かつまた神の知性と神の意志は同一であるがゆえに、神は意志するはたらきそのものである<sup>(24)</sup>。

### 2.3 神の本質の一性に関する議論のまとめとペルソナ論

以上が第3章から第34章までのトマスの議論である。その特徴として考えられるのは、トマスが各章で行っている議論は多く、その直前の章の内容あるいは直前のテーマを踏まえるか、あるいは、神が第1の動かすものである、それゆえに神は不変であり、またすなわち神は純粹現実態であるということに基づいて展開されているということである。その意味でトマスのここまでの議論は体系的と言える。

ここまでの議論と、これ以後の議論にトマスは明確な区別をつけている。第35章でトマスは、そこまでの議論がカトリックの信仰箇条にある箇条の一つ、「一なる全能の神を信じる」で総括されていると述べた上で、第36章にて、これまでの議論は、キリスト教の教えなしでも、すなわち神からの啓示なしでも、到達可能であったと述べる。トマスは言う。「また、以上、ここまですべてで神について論じてきたことは、確かに、多くの異教の哲学者によって繊細に考察されてきたことである。これまで述べてきたことについて、彼らの中に間違いを犯したものがままたたとしても」<sup>(25)</sup>。

それに対し、神が単一でありながら、父であり、子であり、聖霊であることは、キリスト教以前の哲学者は誰一人到達しなかったとトマスは述べる。すなわち「また、神についてキリスト教の中で我々に伝えられてきたものには、それ以外の、彼ら〔異教の哲学者たち〕には到達できなかったものがある。このようなものについて我々は、キリスト教の信仰に従い、人間の感性を超えて教えられているのである。また、既に示されたとおり、神は一であり、単一であるので、そう言いながらも、神は父であり、子であり、聖霊であって、しかもこれら3つが3つの神ではなく、1つの神であるということ〔すなわち三位一体の教義〕もあるが、これについても確かに、我々は、我々に可能である限り、考えようと思っている」<sup>(26)</sup>。こう述べた後、トマスは第37章から、神の「ペルソナ」(persona)についての議論を開始するが、ペルソナ論のうち、神の言葉すなわち子のペルソナに関する議論は、第3章から第34章までの議論のうち、神の自己認識に関する議論に基づいており、父のペルソナとこのペルソナが同一であることについては、「神の存在は知性認識するはたらきと同一である」こと、すなわち神がその存在であり、知性認識するはたらきそのものであることに、まず基づいている<sup>(27)</sup>。聖霊のペルソナに関しては、単なる意志ではなく、愛に関する議論が新しく登場し、また目的という概念も登場する。その意味ではこれまで

のだけを主たる根拠として議論が始まっているわけではないと見ることもできるが、しかしながら、愛に関する議論を始める時に、理解された善という概念を用い<sup>(28)</sup>、第3章から第34章までの議論にあった神の意志に関する議論と神の愛に関する議論とを媒介している。すなわち、三位一体についての議論は三つのペルソナの議論から始まるが、それは神の一なる本質に関する議論を踏まえている。すなわち、ペルソナ論以降は、キリスト教の啓示なしでも到達することのできる神の本質の一性に関する事柄についての議論を踏まえつつも、徐々にキリスト教の啓示の中で得られる論拠が出てき始めていることが伺われる。

個々のペルソナについての議論ののち、三位一体そのものについての議論が始まる。そのなかで、ペルソナの属性というべき5つのしるしの議論<sup>(29)</sup>を経て、ペルソナの中の4つの関係の議論<sup>(30)</sup>、そして、ペルソナとしるしは理解においてのみ異なる<sup>(31)</sup>ということ、関係的属性が神の本質そのものである<sup>(32)</sup>ことが論じられる。

トマスは言う。「関係的属性そのものは、神の本質そのものであらねばならない。すなわち、関係的属性は、自存するペルソナそのものである。また、神のうちに自存するペルソナは神の本質以外ではあり得ない。そして、神の本質は、既に示されたとおり、神の存在そのものである。それゆえ〔結論として〕残るのは、関係的属性は、事物として神の本質と同一だということである」<sup>(33)</sup>。すなわち、神の本質が神の存在に他ならないことが論拠とされ、神の一なる本質がそのまま関係的属性であり、自存する3つのペルソナであると、トマスは論じる。最後に付加的にポレタヌス派という異端が排斥されている<sup>(34)</sup>が、三位一体の議論はここで一旦完結する。

## 2.4 神性の業① 神の手になる世界秩序

第68章から、神性の業について論じ始めるが、その際トマスは「三位一体の業について考えなければならない。そして、事物のうちで神の第1の業は存在そのものである」<sup>(35)</sup>と述べる。つまり、トマスにおいて、事物が存在することは、三位一体の業であり、三位一体の議論を経てこそ論じられることであって、哲学のみで到達できる単に一であるのみの神の業ではないことが示唆されている。神は存在の原因である。他のものは神から存在を分有することによって存在する。そして、第69章以降では神による創造の業、すなわち神がすべてを存在させる業を始めとする神の業が議論される。

創造された世界は、神を頂点とした然るべき秩序の下に序列付けられる。それは純粹現実態である神により近いほど、より多く現実態を有し、より少なく可能態を有するが、神から遠ざかるにつれて、可能態がより多くなり、現実態がより少なくなるという序列である<sup>(36)</sup>。現実態の多寡は、そのまま消滅し得るか否かにつながる。質料と形相から成る物的実体は生成消滅し得るが、非物的実体は消滅することがない。トマスは、天体を生成消滅はしないが、場所的変化の可能態は持たないと考える<sup>(37)</sup>。しかし、これは、中世の宇宙論に基づいたものに過ぎない。むしろ、ここでは、神を頂点とした秩序が、現実態と可能態のいわば混合の度合いにしたがって序列付けられていることに注目すべきであろう。すなわち、神の本質の一性に関する議論に際し、

神が純粹現実態であることが多くの事柄で論拠とされたが、神を頂点とする世界秩序に関しても、現実態という概念が重要な役割を果たしているといえることができるということである。

## 2.5 神性の業② 人間は現実態において完成する

そして、非物体的な存在者は必然的に知性的実体であり、これが最上の被造物であることが述べられる。知性的実体は決断に関して自由であること、そして知性的実体にも序列があり、人間は、知性あるものとしては最低の序列に位置するとされる。最高の知性である神は純粹現実態であるが、それ以外の知性ある実体は、現実態と可能態とを有する。そして、知性ある実体のうち最も下位のもの、最初、可能態において理解するものとされる。すなわち、人間は生まれながらにして何かを知っているということがない。この人間の理解するはたらきをする知性を、それゆえに可能知性と呼ぶとトマスは述べる<sup>(38)</sup>。

それゆえに、人間は感覚を通して知性認識をおこなうということになり、感覚によらない知性認識はあり得ない。それゆえ、感覚によって得た表象にはたらきかけ、可知的形象を抽象する能動知性の存在が不可欠となる<sup>(39)</sup>。

人間は知性ある存在としては、本来非質料的、非物体的であるので、その靈魂は消滅し得ない。これは全人類の消滅後も同一の可能知性あるいは同一の能動知性が残るということではない。以後、靈魂が1人につき1つであること、靈魂が物体の潜在力から生じたのではないこと、神の実体に属する神の一部ではないことが論じられる<sup>(40)</sup>。

また神が、被造物を存在せしめる、すなわち創造するということがどういうことかという議論に戻る。神は存在させるというはたらきを直接、無媒介に為す、すなわち被造物を直接、無媒介に存在させる。そして、それは必然性に縛られてなすのではなく、自らの意志によってなすのであり、そして、神は永遠であるので、変化することなしに、創造の業をなしたのであり、それは、先行する永遠の運動、永遠の質料なしになしたのである<sup>(41)</sup>。

第100章にて、トマスは、神は諸物を知性と意志によって生み出したのであるが、知性は目的を原理としているので、したがって神によって作られたものはすべて、目的のために存在するものでなければならないと述べ、目的論的世界観を提示する。それを踏まえて、すべてのものの最終目的は神の善性であることが、神の意志が本来的に意志しているものは神の善性であると、神の意志について論じられたことを論拠に述べられ、諸事物の多様性は、被造物が神の善性を完全に表すのは不可能であり、他のものによって補われる必要があるということのためであり、それゆえに世界には、単一の神の存在を分有し、単一の神の善性に類似する多くのものがあるとされる。このことはまた、世界内のすべての運動変化、すべてのはたらきが目的としての「神の善性に向かっていく」ということでもある<sup>(42)</sup>。

そして目的には自然本性的なものと、自然本性を超えたものがあり、人間はすでに述べられたように、自然本性的に、感覚によって知性認識に至るが、感覚できるものは物体に限られており、物体を超えている靈魂あるいは知性は、感覚が達することを認識することでは、人間の自然

本性的欲求を満たすことはできない。すなわち、自然本性的な認識能力のみでは、その自然本性的欲求を満たすことはできない。しかし、自然本性的欲求が空しいということはありません、「我々に親和的なはたらき手よりも崇高ななんらかのはたらき手によって、我々の知性が現実態になる」時、我々は最終目的を認識し、自然本性的な欲求を満足させる。すなわち、神をその本質によって見ることこそ知性ある存在者の最終目的であり、それを至福と呼ぶとトマスは言う<sup>(43)</sup>。

ここでのトマスの議論もまた、現実態という概念が登場しており、現実態によって記述することが可能であろう。すなわち、物体、質料である身体においては、その欲求が現実態となっても、それは知性ある実体である人間の自然本性的な欲求の現実態ではなく、したがって人間の自然本性的な欲求を満たすことはできない。人間の知性は神の善性の認識において現実態となることで、その自然本性的な欲求を満足させるということである。しかし、ここで直接言及されているのは、人間の知性は現実態においてその自然本性的欲求を満たすということであり、純粋現実態である神を頂点とした序列という考えは背景に退きつつある。

## 2.6 神性の業③ 人間の完成が世界の完成

神以外のものは本質によって善ではあり得ず、分有によってのみ善である。それゆえ、被造物の善性には、植物の不毛や動物の出生の場合の奇形のように、善性の不足、秩序からの逸脱が起こり得るのである<sup>(44)</sup>。

善に対する悪についての議論、罰に関する議論を経て摂理に関する議論に入る。神は上位の被造物を通して下位の被造物に対する支配をおこない、知性ある実体に関しても同様である。ゆえに、天使たちにも序列すなわち位階がある。また、神が人間の知性を統べる方式は物体とは異なり、人間知性は感覚によらねば完成することがない。そして、最下位の知性ある実体である人間は、その意志は神によってのみ影響される<sup>(45)</sup>。

宇宙の中の原因の秩序の外で奇跡をなすことは、第1の動かすものである神にのみ当てはまるのであり、それは宇宙より上位の原因によって宇宙で何かが起きているということであるから、上位の原因に下位の原因が従っているという秩序は保たれている。それゆえに奇跡は自然に反するものではない<sup>(46)</sup>。

摂理は悪を被造物からは排除せず、摂理の中に悪を取り込む<sup>(47)</sup>。

神は人間のために、特別な仕方では恵みによってはからう。そして、罪によって目的への正しい秩序から離れた人間は、恵みの賜物によって罪を赦されて、目的への正しい秩序に戻される。罪は赦され得るものであるが、赦し得るのは神だけである<sup>(48)</sup>。

そして、目的への秩序という点では、人間は知性ある存在者のなかで最も物体に近接しているものの一つである。それゆえ、物体的自然全体は人間のために作られており、物体的自然全体の完成は、人間の完成にかかっている<sup>(49)</sup>。

そして、人間の完成は、完全な動かし得ない安らぎであり、神の永遠が不変であることを根拠としていることから、人間の完成に際して、人間が永遠の命を得ることになる。そして、人間は



自然本性的に身体を有するので、人間の完全な動かし得ない安らぎ、すなわち至福においては、人間は身体に再び結びつく。これが人間の死からの復活である<sup>(50)</sup>。

復活とは、靈魂がまったく同じ身体をその本性を変えることなく取り戻すことであることから始まり、身体の復活に関して議論が展開される。そして、その後、復活した者たちの業、すなわち至福における神の直観について論じる。そして、復活後の人間が生きるべき物的宇宙の再創造と、死後、復活後の罰、死後の償いについて論じられ、そして復活後の至福、死後、復活後の罰、死後の償いに関して言われたことは人間以外の知性的存在にも当てはまるということが述べられる<sup>(51)</sup>。

以上が、トマスの議論の要約であるが、ここで取り上げておきたいのは、物的自然の完成は人間の完成にかかっているということ、そしてこの完成が至福だということである。すなわち、人間の知性が神の善性の認識に関して現実態となることで、物的自然もまた、神の善性を目的とし、それぞれの自然本性に応じた現実態として完成するということである。トマスは、自然本性の現実態においても可能態においても悪はなく、罪や悪は存在の欠如であると考え。償いは自然本性の回復であり、すなわち存在の回復の業である。ここには、神の、人間を通した、人間を頂点とする物的自然全体の救済あるいは完成という図式があると思われる。だが、純粹現実態を頂点とし、現実態の度合いによる序列づけられた世界秩序という考え方は、もはや背景であり、人間の知性の現実態における完成の方が前面に出ている。

## 2.7 キリストの人性

以上、第1部の第1篇で、三位一体の神性について論じられた上で、キリストの人性について論じられる第2篇が始まるが、最初に論じられるのは、最初の人間に与えられた掟と、人間の原初の完全さについてであり、次いで現在とその罰、人間の自然本性すなわち人性の汚染について論じられ、そこまで論じた後初めて、キリストによる人性の再生について論じられる。神は完全な善であるがゆえに、至福を目的とする人性が至福に至れないことを放置することはない。そして、人性を汚染から回復させるのは、人間にも天使にもできず、神の恵みの力によらねばならないが、人間が原罪の償いをするのでなければ神の正義に適ったことにはならない。それゆえ、神は人間になって、人間として罪の償いをしなければならなかった<sup>(52)</sup>。そして、トマスは言う。「これ〔受肉の神秘〕によって、なんらかの意味で神の業全体の普遍性が完成する。つまり、人間、すなわち最後に造られたものが、ある意味論を描いて彼の始原に、諸事物の始原そのものと受肉の業によって1つになって帰るといふ時に」<sup>(53)</sup>。

そして、受肉をめぐるさまざまな異端や異教の誤りを排斥した上で、カトリック教会の受肉に関する教えを述べる。そして、一なるペルソナが人性と神性を有し、そのはたらきは人性と神性に応じて二つだが、人性は神性の善を分有するとされ、そしてキリストは真理知においても、恵みにおいても完全であるとされる。したがって、キリストは恵みに満ちており、知恵に満ちていた<sup>(54)</sup>。

そして処女懐胎はキリストにふさわしかった、ということ述べた上で、マリアについて論じた後、キリストが「人間に代わって死を受けることで、人間を購うために」「死なねばならないことになり、体と靈魂の面で苦しみを受けるものになった」という不足を引き受けたことを論じる。死が、人間を購う手段として選ばれたわけに始まって十字架上の死とそれにまつわる苦しみについて論じられ、埋葬と古聖所に下ったことについて考察した上で、キリストの復活について論じられる。2重の死、すなわち体の死と神から分離することによる靈の死と、2重の生、すなわち体の生と、信仰による、神による生について考察した上で、復活と昇天が謙遜に対する2つの報いであるということ、この報いを受けたのがキリストの人性であったことが論じられる<sup>(55)</sup>。

その後、最後の審判について議論がなされ、これまでの議論でもトマスは数箇所、信仰箇条と自分の議論のすりあわせをしてきたが、最後に信仰箇条そのものをどう区切るかについて論じ、信仰に関する第1部が終わる<sup>(56)</sup>。

以上がトマスのキリストの人性論の要約であるが、キリストの人性論に入ると、現実態という概念はほとんど登場しなくなる。わずかに、キリストが恵みに満ちていたことに関する議論と、キリストが知恵に満ちていたことに関する議論とで、トマスは現実態という概念を持ち出す。

恵みに満ちていたことに関する議論においてトマスは、人間と神の結びつきについて、好きという気持ちを介して神と一つになる恵みと、ペルソナの一性を介して神と一つになる恵みとを取り上げ、ペルソナの一性を介するものはキリストの人性だけの恵みであるとされた上でもう一つの神との結びつきの恵みがあるとトマスは言う。「しかしながら、両方の恵みの間のこととして、それによって確かに人間は神と、好きという気持ちを介して一つになる恵みが、靈魂のうちで能力態的なものとして実在すると思われる。というのは、この結びつきは愛の現実態によるが、完全なものの現実態は、能力態から出てくるので、その帰結として、その、それによって靈魂が愛を介して神と一つになるという、最も完全な能力態には、なんらかの能力態的な恵みが靈魂のうちに流し込まれたということになる。しかし、ペルソナ的あるいはヒュポスタシス的存在は、なんらかの能力態によらず、諸々の自然本性による。ヒュポスタシスあるいはペルソナはそれら〔諸々の自然本性〕に属する。したがって、人性の神との、ペルソナの一性のうちでの合一は、なんらかの能力態的な恵みによって起きるのではなく、一なるペルソナのうちでの諸々の自然そのものの結びつきによる」<sup>(57)</sup>。

「しかし、ペルソナの……」以下の後半部があることから分かるように、ここで愛の現実態と能力態と言われているのは、後半部にある主張のための準備である。しかし、トマスはここで、キリスト以外の人間の神との結びつきについて重要な示唆をしている。それは、情動によって神と一つになる以外に、能力態によって神と一つになる、すなわち、神を意識していない時でも、潜在的に神と結びついている状態というものを想定しているということであり、そして、その能力態から、完全なものの現実態が出てくるとされており、あえて言うなら、ここでは、能力態は潜在的な現実態であると考えられていると解釈できる。

また、キリストが知恵に満ちていたことについて、トマスはこう言う。「一方、他のそれ〔知

は神によって注入されたものであり、人間の自然本性に適った知が延長される、あるいは延長され得るものすべてを知るためのものである。すなわち、人間の自然本性が、神の言葉によって受け取られたなら、決して完全性に不足が生じないと言ってかまわない。これ〔自然本性が神によって受け取られること〕によって人性は全体として再建されるべきだからある。また、現実態に引き入れられる前で可能態として〔の状態に〕あるものはすべて、不完全である。そして、人間の知性は、理解できるもの、すなわち人間が自然本性上〔本来のかつ現実の存在として〕理解できるものに対し可能態としてある。したがって、このようなものすべての知識を、キリストの靈魂は神により、流れ込んだ形象を通して受け取ったのである。すなわち、人間知性の可能態全体が現実態に引き込まれたこと<sup>(58)</sup>。すなわち、現実態に引き入れられる前の可能態としての状態に留まるものはすべて不完全であり、現実態において人間の知性は完成する。だから、神の言葉が人性を受け取ることで、人性は全体として、現実態において再建されるということになる。確かに、キリストが恵みに満ちていたことに関する議論、およびキリストが知恵に満ちていたことに関する議論では、現実態という概念が出てくる。しかし、ここでの用いられ方は、人間の完成が現実態においてなされるという議論であり、神性による創造の業に関する議論の後半で確認されたように、もはや、純粹現実態である神との関係は前面には出ていない。

### 3. 第2部の要約

希望が救いに不可欠であることを説く。この世では不完全な幸福しか手に入らないという第1部で神の恵みに関して述べられたことを根拠に、だから希望し続けなければならないとされる<sup>(59)</sup>。そして、神に何を望まねばならないかについては、祈りが教えてくれることが説かれ<sup>(60)</sup>、希望とは、可能だが困難で、神の助けによらねばならないほどのことを願うことであり、だから神に希望せねばならないとされる<sup>(61)</sup>。人間が神について知りえることが可能であるかどうかについては可能であることが述べられ<sup>(62)</sup>、神について知ることは十分希望の対象であり、絶望してはならないことが示唆される。第1部で言及された、神の御言葉が我々人間に遣わされたことが、ここでも言及され、それは全人類に、神についての真なる知を生ぜしめるためであったとされる<sup>(63)</sup>。そして、人間が神の栄光に与るということ、すなわち至福直観を得しめられることが、詳述される<sup>(64)</sup>。そして、「これが可能であることは明らかな実例によって示される」という一言を以って『神学綱要』は途絶している<sup>(65)</sup>。

### 4. まとめ

以上、『神学綱要』の内容について要約を試みた。紙幅の都合上、言及できなかったところ、また特に神の一なる本性に関する議論については、各章での主張がどのように論拠と結論との関係にあるのかを記したのみになってしまったことが、この箇所についての考察は、別の論文に回すこととする。

本論文で達成できたことは、『神学綱要』の第1部においては、神の一なる本質に関する議論、

および神の業に関する議論は、現実態という概念を主軸として読み解くことも、一つの読み方として可能であること、そして、神を頂点とする世界秩序が語られるところまでは純粹現実態が重きをなすが、以後は人間の、特にその知性の現実態における完成という観点が前景に出てくる。ここでまとめるなら、純粹現実態である、神を頂点とする世界秩序が語られる箇所、純粹現実態により近く、あるいはより遠く、すなわちより多く、あるいはより少なく現実態を有するという現実態の、言わば度合いに応じた序列という図式が媒介項となり、神の純粹現実態と、人間の現実態とが『神学綱要』第1部の論考の、前半と後半それぞれの中心をなしているという読み解き方の可能性を示唆できたことである。しかし、これはいまだ示唆に留まるものであり、この読み解き方が、トマスの思想をどのように体系的に描き出すことを可能にするかは今後の課題である。

## 文献表

### テキスト

1. S. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in : *Opuscula Theologica*, vol. 1, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae, Grundriss der Glaubenslehre*, übersetzt von Hans Louis Fah, Heidelberg 1963
3. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J. Regan, New York 2009
4. Thomas Aquinas, *Aquinas's Shorter Summa, St. Thomas Aquinas's Own Concise Version of His Summa Theologica*, Manchester 1993

### 参考文献

1. Otto Herman Pesch, *Thomas von Aquin, Grenze und Größe mittelalterlicher Theologie, Eine Einführung*, Mainz 1995
2. Jean-Pierre Torrell, O.P., *Saint Thomas Aquinas, vol. 1, The Person and His Work*, translated by Robert Royal, Whashington D.C. 1996

### 註

1. Cf. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J. Regan, New York 2009, Preface, p.vii.
2. Cf. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J.Regan, New York 2009, p.8 ; Jean-Pierre Torrell, O.P., *Saint Thomas Aquinas, vol. 1., The Person and His Work*, translated by Robert Royal, Whashington D.C. 1996, p.165.
3. Cf. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J.Regan, New York 2009, p.8 ; Jean-Pierre Torrell, O.P., *Saint Thomas Aquinas, vol. 1., The Person and His Work*, translated by Robert Royal, Whashington D.C. 1996, p.164.

4. S. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in : *Opuscula Theologica, vol. 1*, Marietti 1975, p.I., cap.2. 以下、『神学綱要』からの引用、『神学綱要』への参照はすべてマリエッチ版の章番号、場合によっては節番号を示し、書名をCT とのみ表示する。
5. Ibid.
6. CT, p.I, cap.3.
7. Cf. CT, p.I, cap.4.
8. Cf. CT, p.I, cap.5-8.
9. Cf. CT, p.I, cap.9.
10. Cf. CT, p.I, cap.10-11.
11. Cf. CT, p.I, cap.12.
12. Cf. CT, p.I, cap.13-14
13. Cf. CT, p.I, cap.15.
14. Cf. CT, p.I, cap.16-17
15. Cf. CT, p.I, cap.18.
16. Cf. CT, p.I, cap.19.
17. Cf. CT, p.I, cap.20.
18. Cf. CT, p.I, cap.21.
19. Cf. CT, p.I, cap. 22-23.
20. Cf. CT, p.I, cap.24-27.
21. Cf. CT, p.I, cap.28-31.
22. Cf. CT, p.I, cap.32.
23. Cf. CT, p.I, cap.33.
24. Cf. CT, p.I, cap.34.
25. Cf. CT, p.I, cap.35-36.
26. CT, p.I, cap.36.
27. Cf. CT, p.I, cap.37.
28. Cf. CT, p.I, cap.45.
29. Cf. CT, p.I, cap.59
30. Cf. CT, p.I, cap.60.
31. Cf. CT, p.I, cap.61.
32. Cf. CT, p.I, cap.66.
33. Ibid.
34. Cf. CT, p.I, cap.67.
35. Cf. CT, p.I, cap.68.
36. Cf. CT, p.I, cap.74.

37. Cf. Ibid.
38. Cf. *CT*, p.I, cap. 75-80.
39. Cf. *CT*, p.I, cap. 81-83.
40. Cf. *CT*, p.I, cap. 84-86, 90-94.
41. Cf. *CT*, p.I, cap. 95-99.
42. Cf. *CT*, p.I, cap. 100-102.
43. Cf. *CT*, p.I, cap. 106.
44. Cf. *CT*, p.I, cap. 109, 111.
45. Cf. *CT*, p.I, cap. 114.
46. Cf. *CT*, p.I, cap. 124, 136.
47. Cf. *CT*, p.I, cap. 141-42.
48. Cf. *CT*, p.I, cap. 143-46.
49. Cf. *CT*, p.I, cap. 148.
50. Cf. *CT*, p.I, cap. 149-51.
51. Cf. *CT*, p.I, cap. 153-84.
52. Cf. *CT*, p.I, cap. 185-200.
53. Cf. *CT*, p.I, cap.201.
54. Cf. *CT*, p.I, cap.202-16.
55. Cf. *CT*, p.I, cap.221-40
56. Cf. *CT*, p.I, cap.241-46
57. *CT*, p.I, cap.214.
58. *CT*, p.I, cap.216.
59. Cf. *CT*, p.II, cap.1.
60. Cf. *CT*, p.II, cap.2.
61. Cf. *CT*, p.II, cap.7.
62. Cf. *CT*, p.II, cap.8.
63. Cf. *CT*, p.II, cap.8., 571.
64. Cf. *CT*, p.II, cap.9.
65. Cf. *CT*, p.II, cap.10.